

オランダ医官・ポンペが我が国にもたらした 頭蓋骨の由来に関する調査

神谷敏郎・金沢英作

はじめに

東京大学総合研究資料館医学部門に保存されている「東京大学医学部解剖学教室標本台帳」は明治三十年頃、小金井良精(東京帝国大学教授、一八五八—一九四四)によって整えられた。この分厚い台帳の第一頁を開くと、冒頭に No. 1. Schädel. Holland. von Herren Generalstabsarzt Matsumoto geschenkt と記帳されている。この第一号標本のオランダ人頭蓋骨(図1)を寄贈した松本軍医総監とはかつて江戸の医学所三代目頭取を務めた松本良順である。この頭蓋骨は良順が長崎において師事したポンペ (Johannes Lijdius Catherinus Pompe van Meerdervoort, 1829~1908) より譲り受けたとされるものである。長崎においてポンペについて学び、その後、師を助けて西洋医学教育の受入れと、附属病院の創設に活躍した良順は文久二年(一八六二)に江戸に召還され、西洋医学所頭取助(副頭取)に就くが、この時に頭蓋骨も江戸に持ち帰り、医学所において教育標本に供した。ポンペの手から松本良順に託されたオランダ人頭蓋骨は江戸ではたった一つの貴重な標本となり、医学生の間で奪い合いであった。「大勢の学生が日夕、手に取って観察したので、終には手垢で黒光して、まるで漆で塗ったようになった」と、当時の医学所を語る記録に⁽¹⁾残されている。

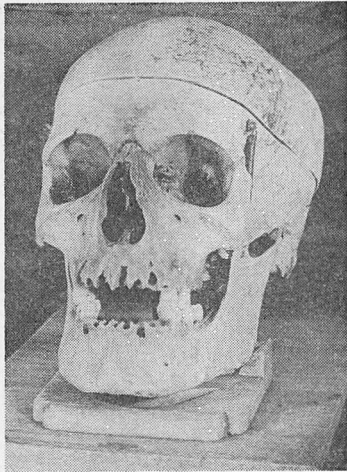


図 1 東京大学医学部解剖学教室
第 1 号骨格標本

この標本については次のような由来がある。ポンペが一八五七年（安政四年）、第二次海軍伝習隊の一員としてオランダから日本に来る航海の途中で一人の海軍士官が不幸にも病に倒れ、臨終に際して、「せめて、頭骨なりと日本に持って行って医学教育に役立てて欲しい」という遺言を残した。この同僚士官の遺志はポンペの手で実行に移された。同年九月に長崎に上陸したポンペは、周知の如く、五年間の医学教育に邁進するが、その際、この頭蓋骨は解剖学の教育標本として使われた。一八六二年、十一月に日本を去る際、ポンペは日本における西洋医学の発展を願ってこの標本を愛弟子の松本良順に託した。恩師の意を継いだ良順はオランダ士官の頭蓋骨を江戸へ持ち帰り、活用したが、この貴重な標本は明治維新前後の混乱期にも失われることなく、保存されてきた。その後の社会の急速な変化の中で、この骨の存在は忘れられていたが、たまたま最近になって作家の司馬遼太郎氏の小説「胡蝶の夢」の中でこの骨が取り上げられた。氏はその中で、ポンペのもたらした頭蓋骨を「西洋医学伝達の印可」として位置付け、その存在意義を改めて強調している。筆者の一人、神谷（当時東大講師）は、その骨が東大にあるかどうかという氏からの問合せを受けて、苦勞の末、その骨を捜し出した³が、その時、改めてこのいわく付きの骨について調べてみると、

色々と興味のあることがわかってきた。

この頭蓋骨（図 1）の人類学的特徴は国立科学博物館人類学部門の佐倉朔博士によると「顔面頭蓋に見られる細かい形態の特徴や計測値などを総括してみると、この骨の主は北欧系人種の特徴を備えた二十五―六歳の男性であったと推定できる。臼歯の磨耗程度については、百年前の欧米の食生活を考慮に入ればこの程度の磨耗が二十歳代中頃に見られても決して矛盾するものではない」ということである。したがって骨自体はこれまで語られてき

たようにオランダ青年のものに間違いないものと思われる。しかし、この骨にまつわる由来については混乱がある。

一、骨の由来についての混乱

この頭蓋骨の話について書かれた文献のうちでよく知られているのは、鈴木要吾著「蘭学全盛時代の蘭疇の生涯」(昭和八年)という本である。この中には「安政三年、幕府の招聘に応じてヤーパン号が和蘭海軍教官、およびポンペを乗せて渡航中、一人の士官が死んだ、肝臓病が重くなつていよいよ絶望という時、軍医のポンペに遺言して云うには……(後略)」(傍点筆者)、という記述がある。また、医学の権威であった呉秀三の文献にも同内容の記載があったので我々は青年士官の死というのが航海中であつた、と思ひ込んでいた。ところが、明治三十三年の松本良順が自分の半生を顧みる談話をよく読むと次のように書かれている。

「……其頭蓋骨は和蘭の某という海軍士官でポンペの友人の骨だ。どうして又ポンペが之れを持って来たかという此士官が丁度ポンペの日本に渡航する時分に、肝臓病でむつかしくなつたが、其臨終に於てポンペに向い、おれも自分は起きられない。これでは海軍伝習の教官として日本に渡ろうと思つたことも叶はぬから。責而のことに君がおれの頭でも持つていって。生徒に解剖のことも教えてくれないかと遺言した。そこでポンペは友人の遺志を受けて。其頭を晒して日本にもつてきたのだ。今でも此骨は東京大学に納めてあるが。それは私が納めたのである。(後略)」(傍点筆者)

傍点から判断する限り、士官の死は渡航前であつたとするのが順当である。この文献は良順がいかに三十年以上前の記憶を語つたものとはいへ、骨をもらつた本人が言うことであるから最も信憑性がある。林郁彦は次のような記述をしている。「此の骨については一つの美談がある。ポンペ等一行が本国を出発する直前に、同行の筈の一人の和蘭士官が急に発病して死亡した。其臨終に際し、自分の頭の骨なりと日本へ携帯して……(後略)」(傍点筆者)。この記述は良順の談話をそのまま、やや省略して書いたものと思われる。鈴木要吾の文献は一般的な読者を対象としたいわゆる読物の類であるか

ら、一次史料として使うのは適當でないかも知れない。吳秀三はこれを引用したのか、それとも他の史料によつたのか不明である。航海中に船員が死んだ場合、当時の海軍の風習として死体は必ず海中に葬られた。衛生觀念からいっても、船中に死体を置くことはむずかしい。またポンペもカッテンダイケも航海中にそのような大事件のあつたことを記していない。このようなことを考え合わせると、我々は、士官の死は航海中というよりは、航海前であつたと考える方が適當であるとの結論に達したが、その証拠はオランダ側の史料に残されているかも知れないという判断から、現地での調査を進めた。

二、オランダにおける史料

筆者の一人・金沢は一九八一年から一九八三年にかけて、オランダ・ライデン大学に解剖学の研究のため留学したが、滞在中にポンペの骨に関する史料を捜すため、いくつかの施設を訪れた。オランダにおいて、日本関係の史料を最も多く保存しているのはハーグの国立文書館(Rijks Archief, Den Haag)である。ヤーパン号やポンペ関係の史料は Factorij Japan というカタログの一八六〇年前後を請求すると大きな紙箱に入つて出てくる。この中からポンペ関係のものを挙げると、先ず相当な量のポンペの手紙がある。これらはバタヴィアあての薬や医療器具の注文書、オランダ医療局あての日本での医療上の問題点、前任者ファン・デン・ブルックのこと、等々である。これらの内容については宮永孝氏の報告⁽⁷⁾があるが、我々はこれらの中に頭蓋骨のことが書かれていないかどうか、オランダ人学生に閲覧してもらつたが、それらしきものは無かつた。次いで一八五七年の史料一六四〇番の二八六号はヤーパン号が出島に着いて間もない頃の海軍伝習隊員三十七名の給与表である。隊長のカッテンダイケをはじめ、ポンペ、トロイエン等の名前が見られる。ロッテルダムから乗船したホーデンペイル(ジャワで下船)に代つてジャワから乗り込んだ海軍主計・ウムグローフェの名前も見られる。二等航海士の二名、ラインとヘウマンが到着直後にそれぞれ、バレイラ、ダウエスに代つていることも記されている。さらに史料

一六四一番の二七号は一八五八年の給与表である。一八五七年のものと大きな差はないが、カッテンダイケの日記にも記されている一八五七年十二月の二名の隊員の死(ステケレンブルグおよびダテラー)が記載されている。これらの給与表、特に一八五七年のものによって、日本に到着した隊員の氏名は確実に知ることができる。士官の死が出発前であったとすれば、出発前の乗組員表に何らかの記載があると思われる。しかし、その乗組員表は史料のすべてに目を通したにもかかわらず、発見できなかった。我々はこの他にも一般の積荷記録の中に頭蓋骨らしきものがないかどうか調査した。ポンペが手荷物としてオランダから運んだという可能性の他に、別便で送ったという可能性もあるからである。しかしながら、残っている多くの記録は織物などの貿易品で、私的なものの記録は残っていなかった。

国立文書館の二階には海軍関係の史料を保存している第二部局がある(主任・グラーフ氏)。ここにはポンペの海軍における経歴を記した史料がある。これは *Stamboeken Marine-Officieren* というオランダ海軍の重立った人物の経歴が記されている分厚い本である。これにはポンペが海軍に在籍していた時の任官と昇進、勤務と任地、戦歴、摘要などが書かれている。これはポンペの史料としては貴重なもので、すでに大滝紀雄氏によって、詳しい報告がなされている。⁽⁸⁾これは、いわば公文書であるので、骨の事などは記載されていない。グラーフ氏の話によると、この部局でポンペに関するものはこれだけであるということなので、我々はこの国立文書館での調査をこれで打切った。

国立文書館の調査では十分な史料を得ることができなかったので、次にロッテルダムの海事博物館でヤーパン号関係の史料について尋ねた。この博物館はエラスムス大学医学部のすぐ近くにあるはずであったが、取壊されて街中の別のビルに移っていた。この話では、ロッテルダム港を出る船舶の積荷記録や乗船名簿はすべてロッテルダム水上管理所文書館 *Archief Waterschout van Rotterdam* に保存されているとのことであった。しかし、ここに電話をすると、ロッテルダム

は一九四〇年のドイツ軍の爆撃により、壊滅的な打撃を受け、それ以前の文書は全て灰燼に帰したという返事を受けた。この返事は、いわば我々の希望を打砕くものであった。ヤーパーン号の乗組員のオリジナルメンバーや、その時積込まれた荷物に関する調査はこれでほぼ不可能になった。

我々の調査が行き詰っていた頃、スハウテン氏 (Dr. Schouten 元王立熱帯研究所長) から連絡があった。スハウテン氏はオランダで唯一のポンペ研究者であり、少し日本語も話す知日家である。氏にはすでに我々の調査目的を知らせて、調査の協力を取りつけてあった。その連絡とは、ポンペ自身の論文——日本における医務報告書 (安政四・五年)——に頭蓋骨の記載がある、ということであった。この論文は蘭領インドネシア医学記事という雑誌にポンペが投稿したもので、日本でもポンペ研究者の間では知られているものである。この論文は昭和七年、板沢武雄によってその大筋が日本語に訳されている⁽¹⁰⁾。また、ポンペは同内容のものを英語で王立アジア協会の雑誌に投稿している⁽¹¹⁾。我々はこれらの日本語と英語の論文には目を通していたが、原典となるオランダ語の論文は、言葉がよく理解できないので十分に読んでいなかった。ところが、骨に関する記載はこのオランダ語の論文にだけ載っていたのである。それはこの論文の長いイントロダクションの解剖学教育についての部分にあり、次のような文章である。

De ontleedkunde en weefselleer wordt, helaasi nog geheel theoretisch gegeven, ten minste voor zovvrrre het practischgedeelte van het werken op het lijk afhangt; gelukkig had ik vele ja de meeste beenderen van het menschlijk hichann in bezit, die van den schedel allen, zoodat ik de osteologie geregeld met hen kan vervolgen.

骨のことが書かれているのは傍線部のほんの二行ばかりであるが、これを英語に訳すと、

Fortunately, I already had most of the bones of the body and all the parts of the skull.
と、なる。すなわち、ポンペははじめから解剖学を教える目的で、日本に来る前に骨格標本を用意していた。さらにそ

これらの骨は全身骨格と頭蓋骨のすべてである、というのである。我々はこれまで、頭蓋骨だけを追って来たが、ポンペは全身骨格も持って来ていたのであった。しかし、全身骨格のことについては松本良順もその他のポンペの門下生も何も語っていない。ポンペは頭蓋骨だけを良順に贈り、その他の全身骨格をどこへやったのだろうか。自分で持って帰ったとすれば、多分帰路の船の難破(カリブッ号)で海の底に沈んだのであろうが、もし、養生所に残していったとすれば、まだ日本のどこかにあるのではないか。ポンペのこの記載は、このような新たな疑問を呼び起こしたが、それより重要なことは、これが、それまで我々が発見できなかった積荷記録に代わる、骨を持参したという証拠史料になるということである。

三、ポンペは骨をどのようにして手に入れたか

この記載が今回の調査で我々が知り得たオランダ側の唯一の骨に関する記録である。ポンペの「日本滞に見聞記」(Jaren in Japan)⁽¹²⁾には書かれていないし、カッテンダイケの「長崎伝習所の日々」⁽¹³⁾にも書かれていない。前者はポンペが日本から帰った後、ある程度記憶に頼って書かれた日本滞在記で、部分的にやや正確を欠くところがある。解剖学に関しては、教科書、教材の話は出てくるが、肝腎の頭蓋骨や骨格標本のことが全く書かれていない。前記の論文はポンペが島に着いて一、二年のうちに書かれたものであるが、こちらはオランダに帰ってからである。その間に骨のことはポンペの記憶から消え去ったのであろうか。カッテンダイケの日記はかなり詳しく隊員の行状や隊内に起った出来事を記しているが、骨の主である士官の死のことは書いていない。隊員の死というのは隊においては相当大きな事件であると思われるが、それが書かれていないということは、はたしてそういうことがあったのかどうかを疑わせるものでさえある。この他、スハウテン氏を通じて、ポンペの私文書を見てもらったが、骨のことは書かれていないようである。日本では解剖学上、大きな役割を果たし、また良順が所持していた時にいくつかの逸話をも生んだ頭蓋骨に対するポンペやオランダ側の無関心は何を意味するのであろうか。

乗船前に骨が積まれたとすると、問題は本当に青年士官の死があったかどうか、そしてそれを遺言通り、ポンペが骨格標本にしたのか、を確かめなければならぬ。しかし、すでに述べたようにその証拠となるものが発見できず、現段階ではそのようなことがあったかも知れないし、また別の可能性もあったかも知れない、という推測の域を出ない。別の可能性とは今まで述べてきた骨の由来というのが作り話で、ポンペは例えば大学の解剖学教室あたりからすでに出来上っている骨格を持って来たのではないか、という推測である。もし青年士官の死があったとすると、それから骨格標本を作るまでには相当な時間がかかる。当時の作り方は土中に埋める方式であったから、一〜二カ月というわけにはいかない。ポンペが日本へ来ることが決ってから出発までの期間は長くとも半年である。はたして時間的余裕があっただろうか。一方、当時は土葬が主であり、死体は教会の地下などに埋められた。墓地在手狭になるとしばしば骨が掘り返され、古いものは路傍に放置されるようなこともあり、頭蓋骨は一般人でも入手できたという。特にユトレヒト陸軍軍医学校では病院の死者のほとんどを病理解剖や手術手技訓練のための死体解剖に使った⁽¹⁴⁾という事実があり、その結果として大学では多数の骨が保存されていたと思われる。ポンペがこれを持ち出すということは全く問題がないし、またごく自然であると思われる。ポンペが骨の由来について何も書き残していないのは、それが特に書き残すほどのこともない、当り前のことであつたからかも知れない。このように考えると、良順の語つた骨の由来が、いわゆる美談として良順かポンペによって創作されたのではないかという疑念が湧く。

青年士官の死と篤志遺体の遺言というドラマチックな話に比べて、大学の標本を持参したというのは全く面白味のない話である。我々は解剖学者として、この骨が篤志遺体の第一号であつてほしい。しかし、冷静に推理すると必ずしもそうであつたとは言い切れない。史実としては良順の叙述があるだけである。史実が真実なのか、真実は別にあるのか。我々は解剖学の研究から歴史研究の最も困難なところへまで来てしまったようである。

四、おわりに

我々の今回の調査のヤマはヤーパン号の乗組員が組織されてから乗船するまでの半年間位のポンペの周辺の史実を集めることにあったが、海軍資料の散逸により、目的を達することができなかった。考えてみれば、海軍士官がポンペに遺志を語るといふようなことは極めて私的なことで、史料に残るような事ではないかも知れない。今となっては、真実を知るのにはポンペだけと考える以外にないであろう。しかし、士官の死と遺言があったかどうか、という事実よりも重要なのは、ポンペが良順にそれを語ったということであろう。それこそがポンペが五年間、日本における西洋医学教育の開拓者として活躍した後の日本の医学の発展と若い優秀な弟子達の将来を祈願して贈った真実の言葉であった。

今回の調査に当っては次の方々の並々ならぬご協力をいただいた。青山学院大学教授・片桐一男氏には特にハーグ国立文書館での史料の見方についてご教示いただいた。アムステルダム・元熱帯研究所長・スハウテン氏にはポンペの公的、私的文書に目を通していただいた。ライデン大学医学部解剖学教室・バーカース氏にはポンペ関係の資料を独自に調査していただき、ライデン大学日本学科・ポート氏には医学関係の図書を閲覧させていただいた。その他、国立文書館第二部局・ド・フラーフ氏、ロッテルダム海事博物館ラーフェン氏には研究上の示唆をいただいた。ここに心から御礼を申し上げます。

本研究は昭和五十九年二月の医史学会例会（順天堂大学）で発表された。

追記

本論文を投稿後、東京大学医学部解剖学教室第十三号骨格標本（頭蓋骨）に図2に示したように、この頭蓋骨の来歴を記した書簡の写しが保存されていた事を見出した。この写しは封筒に入っており、標本と一緒に保存用平箱に納められていた。封筒の表には墨で「明治廿二年一月二十五日、佛國婦人頭骨来歴、織田信徳氏書簡東写」と書かれている。ま

織田信徳氏書簡寫

右頭骨ハ文久年間内國ヨリ某(地名)和蘭陀
 國ニ洋行セシ者アリ同國滞留中一日蘭人某來テ
 頭骨ヲ示シ曰ク此頭骨ハ佛人某ノ頭ナリ某嘗テ
 國ノ巫師ノ塚セシカ後病ニ罹リ自ラ其治セザレヲ知リ
 遺言シテ曰ク若シ我死ハ遺骨ヲ以テ當時巫術
 充分進マカレ國ニ送リ呉レヨト蘭人某遺言ヲ守リ
 婦人ノ頭骨及遺言書ヲ合セ日本人某ニ托セシヨリ
 某ハ之ヲ諾シ携帶シテ帰朝セリ後某遺言ヲ守リ
 久遺言書ヲ七ヒ且頭骨ヲ玩弄物ニセト企テタリ
 時ニ大関肥後守及ヒ余ノ七父是ヲ賣テ大関氏
 之ヲ購求セシカ後慶應二年大関氏ヨリ七父謙
 受ケニナリ

図2 東京大学医学部解剖学教室第13号骨格標本の
 來歴を記した書簡の写し

た、この墨書の下にペン字で「此頭の來歴疑はし
 Franonidin Paris が賣品と認む 小金井記」とある。

書簡の要旨は「文久年間にオランダを訪ねた日本
 人某が、不治の病に倒れたフランス婦人の遺言によ
 る頭骨の寄贈をうけ持ち帰った標本」である。本論
 文の主題である第一号標本とこの第十三号標本の由
 來を比較してみると、オランダ青年士官とオランダ
 人医師に嫁したフランス婦人との違いと、標本を日
 本へ持込んだ人物との違いをのぞくと、その背景は
 同一の台本で語られてきたと言つてよからう。時代
 も文久年間のことである。

小金井良精先生が第十三号標本を、フランスの標
 本社の売品と断定された根拠については今のところ
 不明である。しかしながら、今回の書簡の写しの出
 現によつて、個人の遺志による医学教育骨格標本、
 すなわち今日の献体の起りが、日本ではオランダの
 青年士官によるのではないかと言う推察の可能性は
 極めて薄くなり、どうやら作られた美談とする見方
 へ軍配があがった感がある。なぜ美談が作られたの

か、あるいは作られなければならなかったのか、この点は興味を抱かせるが、別に考察してみたい。

ポンペは日本での西洋医学教授の任につく旅荷の内に少なくとも一個体の頭蓋骨を入れて来日し、この頭蓋骨を用いて解剖学示説に供した史実だけが残った(一九八四年七月一日記)。

文 献

- (1) 石黒忠慮 懐旧九十年。博文館、昭和十一年
 - (2) 林郁彦 我国最初の洋式病院長崎養生所を中心とする和蘭医学の黄金時代。中外医事新報一二一五号、昭和九年
 - (3) 神谷敏郎 胡蝶の骨——献身標本の起源を探る——。UP、第十卷六号、東京大学出版会、昭和五十六年
 - (4) 鈴木要吾 蘭学全盛時代の蘭疇の生涯。東京医事新誌局、昭和八年
 - (5) 呉秀三 徳川時代に渡来した外人と学問上に接触したる日本人(第三十九回)。中外医事新報一一七二号、昭和六年
 - (6) 松本良順 蘭疇翁昔日譚。医海時報三百号、明治三十三年
 - (7) 宮永孝 ポンペ書簡について。医史学会例会(一月)昭和五十九年
 - (8) 大滝紀雄 ポンペと日本医学。緒方富雄編、蘭学と日本文化所載、東大出版会、昭和四十六年
 - (9) Pompe van Meerdervoort, J.L.C.: Verslag over de Gouvernements Geneeskundige Dienst op het Eiland Desima en in Japan, over 1857 en 1858. Geneeskundig Tijdschrift voor Nederlandisch Indië, vol. 7, 495-572, 1859
 - (10) 板沢武雄 ポンペ・ファン・メールデルフォールの日本に於ける醫務報告書(安政四、五年)について。中外医事新報、一一八八号、昭和七年
 - (11) Pompe van Meerdervoort, J.L.C.: On the Study of the Natural Sciences in Japan. J. North China Branch Royal Asiatic Society, Nr. II, 1859
 - (12) ポンペ・ファン・メールデルフォールト 日本滞に見聞記(沼田次郎、荒瀬進共訳)。新異国叢書、昭和四十三年
 - (13) カッテンダイケ 長崎海軍伝習所の日々(水田信利訳)。東洋文庫、二十六、昭和三十九年
 - (14) Beukers, H.: Medical Education in the Netherlands in the 19th Century. Mimeographed, 1982
- 神谷敏郎 筑波大学医療技術短期大学部、茨城県新治郡桜村天王台一一一一、電話(〇二九八—五三—三四一六)
金沢英作 日本大学松戸学部、松戸市柴町西、二一八七〇一一、電話(〇四七三—六八—六一一一)

On the History of the Skull Brought to Japan by Pompe van Meerdervoort

by

Toshiro KAMIYA and Eisaku KANAZAWA

Dr. J.L.C. Pompe van Meerdervoort was a medical doctor who stayed in Japan from 1857 to 1862 as a member of the 2nd Dutch naval detachment. He was the first man who brought systematic European medical education and modern clinical technique to Japan. Before going back to his country, he gave a skull which was used in the teaching of anatomy to Dr. Matsumoto who was the first student in Pompe's school. Dr. Matsumoto said that the skull originated from the cadaver of a naval officer, Pompe's friend, who died just before coming to Japan. When he died, he said that he would like to give his own skull to Dr. Pompe and asked him to bring it to Japan as anatomical material. Nobody knows whether the story above is true or not.

We made a research in the Netherlands on the historical materials around Pompe and the naval detachment in 1856 or 1857. Among many historical records, letters and so on, we found the Dutch Scientific paper written by Pompe in which the skull was brought by Pompe. However, there is no confirmation in the materials that the skull was from the naval officer. The difficulty in finding records of naval detachment was due to the German bombing of Rotterdam in 1940. The important historical records before it were completely destroyed.